

## W・サローヤンが描く子供の世界

——教養的読み方(その2)——

伊藤 太郎

**Children's World Described by William Saroyan**

——A Literary Study as Liberal Arts (No.2)——

Taro Iro

少年期の子供が主人公で登場する小説を読むと、自然と懐かしく、自分の昔の頃を思い出す。いつの頃からか忘れていた場面が、一コマコマ意識の底から浮き上がってきて、一瞬、自分がその小説の主人公に成り代わってしまった錯覚に捉られることもある。主人公と同じ視点と感性で物事を見ていくうちに、忘れていた〈自分〉を取り戻したり、今の自分を新たに見つめ直す〈きっかけ〉を得られたりする。「ああ、そういう事だったのか」と、子供の時は分からなかったことや、曖昧なままで放っておいたことなどが、急に解決の糸口をもらって「見えてくる」こともある。その小説が普遍的な意味内容を持てば持つほど、自己再発見、自己浄化の〈手懸かり〉となりうるのだ。

サローヤンの短編小説集を読んで最初に気付くことは、物語の「主人公」、あるいは「語り手」に少年がなっているものが実に多い、ということだ。特に、初期の優れた作品に、その傾向が強いのである。作者自身が年齢を重ねるにつれて、小説の中にも大人の主人公が登場するようになるという事実は、サローヤンに限らないだろう。その場合、概ね残念なことに、後期の作品になるにつれて、まるで人生そのものに対する新鮮な関心や感動が目減りをするように、作品世界の持つ瑞々しさや透明さが次第に薄れていく、そんな印象さえ抱かされることもある。

今回は〈教養的な読み〉の一環として、サローヤンの初期の短編作品の3題を主に取り上げて、子供が社会に第一歩を踏み出すに当たって逡巡とする迷いや不安、胸踊るときめきや感動、あるいは、大人達の無理解さに対する失望と反発、冷たい社会へ諦めと絶望などを考えてみたいと思う。子供の世界に降り立って、同じ地平で社会を見つめ直すこと自体、精神浄化のカタルシス効果をもたらしてくれる。サローヤンの場合には、さらに加えて、子供の瑞々しい感性と問題意識の世界を覗くことによって、「母子癒着」、「登校拒否」、「学校教育の歪み」、「子供らしさの在り方」、「いじめ」、「差別」といった今日の問題を改めて考えるための、一つの視座を与えられる感がする。

前回は、20年代のアメリカの時代性を体現する主人公の若いフラッパー・ガールの性格特性を探って、刹那的快樂追求の強迫性や未熟な自我の病理性を検証した。今回は、前回のように、社会背景や時代精神との関連性の中で、小説の持つ意味を探るのではない。小説作品に展開される子供の世界に、忘れかけていた懐かしき感激の場面を思い出しつつ、安易な人生教訓や処世訓をではなく、人間性や人間社会に関わる本質的問題を解くための一般真理を尋ねようと思う。それをもって、「教養的読み」としたい。

## I. 旅立ちの予感

子供が初めて遭遇する〈旅立ち〉の経験は、言うまでもなく、両親（特に母親）の庇護の翼の下からの、自立の船出の旅であろう。温かく見守る両親の愛情で満ちた「家庭」という空間を離れて、「学校」という、親の目の届かぬ、恐ろしい未知の、しかし少しだけ何故か楽しそうな世界への強制移住を誰しも強いられるのだ。居心地の良い、馴染み深い生活空間を断念するという悲しみと苦痛、それに、新しい友と机を並べることへの微かな心のときめき。不安と期待がまさに錯綜する時期である。『入学第一日』*The First Day of School* は、幼心に緊張感と不安感で一杯になりながら、健気に、勇敢に新しい世界に乗り出して行った、遠き日々の入学当初の光景を読者に思い出させる好短編である。

主人公のジム少年は、生まれると同時に母親を亡くした父子家庭の子供である。しかし幼い頃から、家政婦のエイミーが代理母の役目を果してくれて、細やかな母性的愛情と精神的庇護を与えてくれたらしい。医者らしい父親がきちんと監督の目を怠らない、経済的にも恵まれた家庭のようだ。最近転居をして来たためか、或いは、幼稚園に入れずに家庭でしつけを施すという父親の方針だったせい（インテリの家庭では珍しくない）、今日初めて地元の小学校に入学しようとしている。途中何度も、彼の手をひいて学校へ行かせようとするエイミーに向かって、「おまえなんか嫌いだ」と言っただけで、駄駄をこねるのである。明らかに彼は嫌がっている様子である。案の定、彼の恐れていた通り、初めて見る学校の建物や教室の雰囲気は異様で、彼を大いにおびえさせてやまない。

校長室で会ったバーバー校長先生は、事務的に物事を処理し、相手に親し気に感情移入をするタイプではなかった。アメリカでは小学校が幼稚園を併設している場合が多いので、クラスの他の子供達は一年生と言えども、のびのびと自由に、すでに親しげに仲良くやっている。最初のうちは椅子に座って、ジムは不安気に辺りを窺っていた。しかし、教室内でガムを噛んでいて、担任のピニー先生から注意をされ、平然と、（まるで注意されたこと自体が愉快でたまらないかのように）喜々として、ごみ箱にガムを捨てに行く級友達を見て、彼はなんだか一気に緊張感がとれて、肩の力が抜ける感じになった。ガムのことで先生に注意をされたハンナ・ウィンターとアーネスト・ギャスキンの二人がいっぺんで好きになってしまった。特に女の子が、いたずらっ気を出して、でも余裕の自然体で、そんな冒険行為をしていることがジムには驚異だったのだ。心配していたより、学校は面白くて楽しそうな予感がした。

翌朝さっそくジムも、父親にももらったお金でガムを買って学校に持って行き、先生に注意されることを承知の上でガムを噛んだ。そして期待した通り先生に見つかり注意をされた。誇らしげにゆっくりとごみ箱に捨てに行く時、ハンナとアーネストの二人がジムのちらっと見た。びっくりしたような、喝采を送っているような目配せだった。先生に盾突く真似事をして、仲間入りの儀式を無事済ませたようだ。

校庭でピニー先生の口真似をしながら、ジムは「あなたは何を噛んでいるの?」と、アーネスト・ギャスキンの聞いた。すると、彼は「象の生肉さ」と、機転を利かせた、愉快的な返事で答えた。「ところで君は何を噛んでいるの?」と、アーネストが聞き返した。奇抜な、面白い返事を急には思い付かなかったので、「ガムだよ」と答えたら、彼は腹を抱えて大笑いをした。教室に入るときに、今度はハンナにも思い切って同じ質問を試してみた。授業が始まりそうだったので、彼女は慌てて考えてから、「ツーツー・フルーティよ」と、甘いお菓子の名を即興で

思い付いて答えた。ジムには、その言葉が今まで聞いたこともないような素敵な言葉のように思えた。一日中、その言葉を忘れないように、心の中で繰り返した。

夕食の時、ジムは学校で覚えた駄洒落をさっそく父親に披露した。それから、ガムの一件のこと、ハンナ・ウィンターのことも話した。父親は言葉数少なく、感慨深そうに聞き入っていた。ジムの方からこんなにたくさんを父親に話しかけたことは、今までなかったのかも知れない。夕食後、ジムが、楽しいけど、でもまだちょっぴり寂しくもある学校のことを思い出しながら、機嫌良くコマで遊んでいると、父親が読んでいた新聞をたたんで、ジムの隣に座った。彼らが一緒に床の上に座っているのを見て、エイミーはまた思わず涙を流した。

この短編の中には、新しく学校生活に入ろうとする学童期の少年の、不安、悲しみ、健気さ、気概、素直さ、逞しさ、順応性、楽天性、大らかさ、自由奔放さ、人懐っこさ、いたずら心、友情、初恋感情などの諸々の心の〈在り様〉が、簡潔にして無駄のない文体で、見事に描き出されている。

まず、ジムを待ち受けていたのは、入学当初に学校というものに対して誰しもが抱くあのイメージ、「汚い」、「冷たい」、「臭い」、「暗い」というイメージそのままの校舎と教室だった。とかく、新参者にとっては、これから足を踏み入れようとする未知の世界は、ついこの足を踏んでしまう、拒否的で否定的なものにしか映らないのも事実であろう。学校の教師達も同様で、バーバー校長先生は鈍感で、観察力が乏しくて、家政婦のエイミーをジムの母親だと勘違いして、彼女の軽蔑を受けてしまう。また、担任のビニー先生は「すっかり干涸らびた」老嬢で、厳しくて、堅苦しくて、権威主義的だけれども、もう教育に傾ける情熱はない、女性的潤いもなくなってしまった、そんな印象の先生である。(あくまで少年の視点に立った描写である。)

しかし、不安におびえるのも最初の内だけである。一人疎隔感を味わっていたジムも、ガムの一件を契機にして、級友の中に心の通じ合う友だちを見つけていく。教室内でガムを噛むという行為は、堅苦しいだけの年老いた女教師にわざと逆らって、仲間としてのささやかな団結心と連帯感を急速に築いていく、その助け船の意味を持った。本来、子供はいたずらや悪ふざけをして、息詰まるような緊張の場面を楽しくて愉快なものに変えてしまう魔法使いである。自由奔放に振舞いながら、権威を茶化して価値逆転をもたらす、そんな道化的存在なのである。

ジム少年は、アーネスト・ギャスキンとハンナ・ウィンターの二人の先輩格の級友達に、〈少年らしさ〉の何たるかを教えてもらったのだ。いままで家の外へ出たことが余りなかったし、遠くへ散歩に行くことも余りなかった。素直で従順で大人しいけれども、どちらかと言うと内弁慶のタイプだった。しかし、ジムには不安を乗り越えて行くための、男らしい逞しさと、すばらしい順応性と、茶目っ気のある人懐っこさがあった。それがあったからこそ、彼は入学初日にして、新しい環境の中に見事に溶け込めて行けのだ。その意味では、ジムの順当にして十分な成長ぶりを、彼をそれまでにすくすくと素直に育ててきた家庭での躾の順調さを、指摘せざるを得ないだろう。

そもそも子供の精神的自立には、まず、子供を慈しみ守り育てようとする母性愛に満ちた母親(またはその代理者)との共生・融合の幻想体験が是非に必要である。女性的慈しみの揺籃が保障されて、子供は初めて、同世代同年輩の子供たちとの競合世界に乗り出して行くための、覚悟と意欲を持つ。母親(母親的女性)に十二分に愛されたというほのかな確信が、知らぬ間に無意識領域に、自己存在への確たる自信を育み、次の新しい未知の世界への旅立ちを敢行する決意と勇気を与えることになるのである。

その意味では、愛情深い家政婦のエミリーは代理母としての資格充分であった。彼女は賢くはない。子育ての知識に長けている訳でもない。ジムの成長を目の当たりに見るにつけ、ことある毎に感激の涙を流すだけの、そんな家政婦である。例えば、ジム一人を学校に残して先に家に帰る時、先ほど校長室で見たジムの毅然とした立派な態度を誇らしく思って、嬉し涙を流すといった具合である。ジムが、胸の内ではどれほどの不安と心細さを感じているかが手に取るように分かるだけに、一層、気丈に振舞おうとする彼の少年らしい決意に感じ入るのだ。或いは、ジムと父親が二人して並んで床の上に座っている姿を見て、「何故だか分からないけど」涙するのである。ジムが自分のもとから離れて、父親との男同士の語らいの世界へと入って行く記念すべき場面に立ち会う感激の涙なのだろう。

本来、母親の愛情とはそういうものかも知れない。わが子の成長をひしひしと感じて、一人涙ぐむ。母子の間には言葉は要らない。ただ側に居てじっと優しく見守る。子供は離れて行ってはまた戻って来るのだが、その繰り返しをしながら、次第に離れる距離と時間を伸ばして行く。無理強いはいけない。子供のリズムに任せるべきだろう。子供は、離れてはくっつき、くっついては離れるその繰り返しの中で、母親がいつもそこに居てくれる、自分が戻って来るのを自然に待っていてくれるという確信を育んでいく。自身ゆったりと満ち足りていて、そしていつも子供を受け容れてくれている母親の存在感が、子供の精神的な自立を後押しする促進剤の役割を演じるのだ。一人っ子の甘えん坊でも、然るべき時が来れば、自然と〈親離れ〉を果していく。

父親は、母子の共生関係を断ち、母親的受容世界から子供を引き上げて、男性的なロゴスの世界へと連れていく使命を持つ。そもそもが、父親は子供に、行動の指針、社会規範、善悪の判断基準、人生目標の設定、対人距離の取り方などを教えねばならないのである。子供が、家庭を出て社会に足を踏み出した時に、一人で如何に振舞うべきかを教えるのが役目である。ジムの父親も、いま、やっと自分の出番が回って来たことを確信したのである。彼が新聞をたたんで、息子と並んで床に座るという行為は、上から身降ろす視線の位置から、同じ水平の対等位置へと立場を変ようとする父親の決意を暗示するのだろう。母親がいなかったけれども、今まで順調に息子が育ってきたことを感謝し、今やっと、息子が自分と人生を語る時が来たことをしみじみと認識している様子なのだ。

子供は親の心配をよそに、自然に家庭を卒業し、学校生活の中に参入していくものだ。親の愛情に恵まれていれば、〈親離れ〉を果して精神的な自立に向かうのは時間の問題である。学童期の子供は、親への一方的依存関係ではなく、仲間意識に芽生えた「持ちつ持たれつ」式の相互依存の競合関係を、本来的に志向するものである。翻って日本の現状を見る時、母子関係を清算できずに癒着構造を引きずって、船出を逡巡とする子供たち、自分のエゴや虚栄心を麗しき母性愛だと錯覚して、子供に過干渉・過期待をしてしまう母親たち、仕事を口実に家庭を省みず、育児への大切な父親的介入をしないでいる父親たちの、その存在の多さに気が付くのだ。この短編を教養的に読むと、今日の日本の歪んだ親子関係を見つめさせられる。そして、子供はどうあるべきか、親子関係や家庭状況はどうあるべきかの、指針を考える一つの視座を得られるのである。

## II. 誤解される無念さ

子供が成長の過程で大人たちと接する時、いつも彼らに温かく受け入れられとは限らない。大人たちの無理解な態度や勝手な論理に、戸惑い、反発を示すことが往往にしてある。子供は

理解されない悔しさに泣き、誤解される無念さに憤慨する。大人たちの一方的な〈決めつけ〉の前で、自己弁明がうまく出来ず、窮地に陥った経験は誰しもある。そんな時、子供は自分の不甲斐なさを味わいつつも、自分の言い分の正しさをどこまでも主張して憚らない。『五つの熟した梨』*Five Ripe Pears* は、大人たちの無理解で「聞く耳持たぬ」態度を前にして、盗っ人をしたと非行少年の烙印を押されかかった主人公が、自分の子供らしい〈純真な思い〉を拠り所にして、精一杯の抗弁を計ろうとする、反抗の狼煙の詩である。

小説の主人公、兼、物語の語り手である「僕」が、グラマースクール時代に無実の罪で泥棒扱いをされたことを未だ忘れられず、その時の悔しさと無念さを今晴らせるものなら晴らそうと、当時の校長先生に手紙をしたためる、という設定である。随分といたずらをやったので、鞭打ちの罰も幾度となく受けたのだが、今はそれを恨んでいるのではない。むしろ、鞭打ちの罰は、いたずら好きの腕白小僧には勲章のようなものである。悪い事をした時には、当然の処罰は当然受けるものだと思われ、少年らしい素直さや正義感はずっと身につけている主人公である。少年が我慢できないのは、謂なき誤解から屈辱の処罰を受けたことだった。

忍び返しの付いた塀に囲まれた民家の庭に、梨の木が植えられていて、その枝が塀のこちら側まで伸びてきている。「塀というものはそれが囲っているものだけを守る役目がある訳だから、塀ごしの枝になっている梨は、もし僕の手が届きさえすれば僕のものである」と、彼は論理的な結論を出すのである。休み時間に学校を抜けだし、何週間も前から、目を付けていた梨を取りに行った。実は、その梨の木は、まだ葉が付いていない裸の時から、彼が「眺め続けてきた」ものだった。「猿蟹合戦」の蟹のように、葉が出て、芽が出て、花が咲くのを心待ちにしてきた梨だった。思いを込めて見守ってきた、「彼の」梨だった。

梨はまさに今が食べ頃に熟していた。何とかジャンプをして、彼は最も甘そうなやつを5個だけ取った。一つをその場で食べ、残りをみんなへのおみやげと、遅刻したことへの言い訳にしようと思って教室に持ち帰った。堂々と持ち帰ることが、「泥棒なんかしたのではない」ことを逆に証明してくれるはずだった。しかし、意に反して、梨を見せた途端に、みんなの誤解を買ってしまった。特に担任のラーキン先生は、彼が盗っ人をしたと決めつけた。彼女にとってはその梨は、〈無実の証明〉ではなく、〈盗みの証拠〉にしかならなかった。心外だった。思いもしない誤解だった。

彼は職員室に連れて行かれた。そこで校長のポロード先生が現れるのを待った。何となく自分が泥棒であるような心境に半分なりかけながら、おびえていた。梨もしょんぼりしていた。証拠隠滅のつもりはなかったのだが、別にすることがなかったのも、彼は4つの梨を次々と食べた。木の側で食べたのよりも美味しかった。間の抜けた格好で手の中に残った芯も全部食べて、後で植えて自分の木を育てようと思って、種はポケットにしまった。

校長先生がとうとう現れ、最後の審判の時がきた。彼が何度も咳払いをする度に、世界全体が震憾するように彼には思えた。「梨を盗んでいたそうだね。どこにあるのだね？」と、先生は詰問の口調で尋ねた。てっきり彼は先生も梨が欲しかったからそんな質問をしたと思った。それで一つ残らず食べてしまったことを恥じた。しかし、先生は彼のその恥じらいの表情を、盗んだことを後悔している恥じらいに誤解して、ますます彼は窮地に追い込まれてしまった。抗弁の余地がなくなった。職員室で4つの梨を食べるに至った経緯も、理解してもらえなかった。そして納得できぬまま、彼は罰せられた。悔しくて精一杯泣かずにはいられなかった。

「僕」は梨が実を結ぶ前からずっと、その梨の木を気遣い、慈しみ、愛してきた。彼が梨に託した思いの丈が、「丸々として、黄色く、赤く、陽の光を浴びて溢れんばかりの瑞々しい」実を結ばせたのだ。梨は、生命の営みの〈恵み深さ〉と〈神秘性〉に驚嘆する少年の純真な心に見事に応えてくれたのだ。まさしくその梨は、彼に帰属する「彼のもの」だった。

木にある種の神秘性や威厳性が宿っているのは事実だろう。古来より、木は神の創造力の〈しるし〉であった。木にアニミズム的親近感を抱いて、人は樹木崇拜をしてきた。その木が実を結んだ。生命の営みの本質を知るためには、その熟した実を食べる必要があった。彼にすれば、それは必然の行為だった。梨の実を食べなければ、自然生命力の秘儀に与るという彼の望みは完了しなかったからだ。

Now the pears were ripe and ready, and I was ready.

But it was not to eat. It was not to steal. It was to know: the pear. Of  
life—the sum of it—which could decay.

(p. 165)

農耕の民であったアルメニア人にとって、木や果実は、自然の恵みであり、すべて神からの賜りものであった。祖国アルメニアのアラト盆地では葡萄を始めとして、ありとあらゆる種類の果物が作られていて、果樹に対するアルメニア民族の思い入れの強さは、サローヤンの他の作品『オレンジ』*The Oranges* や『ザクロの木』*The Pomegranate Trees* などからも十分に窺えるのだ。一説に拠ると、カリフォルニアに本格的な葡萄の栽培技術を移植したのも、アルメニア人移民であった。アルメニア移民の子であるらしい主人公の少年に言わせれば、実がなる前から梨の木を慈しんできた自分こそが、塀ごしになっているので誰の物でもない、人に食べられるのを心待ちにしている、その熟れた梨を味わって食べる権利を有するのである。天からの贈物である木の実に、そもそもが所有権を主張すること自体がおこがましいことである。自分が「論理的」logicalであることを自負する「僕」の論理に拠れば、「僕」は盗っ人なんかでは到底ないのである。地上的所有権に優先する権利を行使したまで、なのだ。

そもそも、子供には子供の世界があり、子供の論理というものがある。大人達の世俗的な価値観や一般的な常識というものが通用しない世界である。子供は「思い入れ」や「思い込み」が激しい。乏しい体験や知識を補うために、かなり自分勝手な空想を展開して、自分の世界を構築する。その際大人の強固な論理と戦うために、子供が拠り所として持ち出すのは、自分の世界の純粋さであり、汚れなさである。純真無垢な自分を何処までも主張して憚らない。「自分にはそんな悪意や犯意はなかった」と、自分の善意や善良さを盾に、一人勝手に自分を正当化する傾向がある。

この短編の主人公「僕」も、その例に漏れず自分の身の潔白をを信じて疑わない。先述した通り、果樹に対するアルメニア的情熱も相俟って、自分を犯人扱いした校長先生たちに対する激しい憤りの気持ちが未だもって消えない。「大人と子供」の関係が、そのまま「強者と弱者」「支配と服従」の関係に置き換わってしまうことに納得がいかないのである。「僕」が嘘のつけない正直者であり、誇り高きアルメニア人であることを証明するのは、「僕」が相手を常に善意に解釈するということが、「僕」が何かにつけて底抜けの人の良さを示すということであろう。

しかし、自分の〈純真さ〉や〈人の良さ〉、〈善良さ〉や〈正直さ〉、〈大らかさ〉や〈素直さ〉などをいくら主張しても、言葉で話さない限り、自分の真意や身の潔白を分かってもらうことが難しいことは、「僕」はちゃんと分かりかけている。

A misfortune of youth is that it is speechless when it has most to say, and a fault of maturity is that it is garrulous when it has forgotten where to begin or what language to use. (p. 165)

作者の視点は「僕」のとは少し違って、大人の無理解で一方的な決め付けの態度を告発すると同時に、子供の側のやや独り善がりの論理が、なかなか人の理解を得られないことをも指摘しているようである。

要は、大人の世界と子供の世界の一番の違いは、大人たちが人間について「性悪説」をとるのに対して、子供が「性善説」をとるということだろう。人の成長は、ある意味で「性善説」から「性悪説」への移行プロセスである、と断言できるかも知れない。『アメリカ旅行者への田舎者の忠告』*Old Country Advice to the American Traveler*でも、人を疑うことを知らぬ若者に、「人を見たら泥棒と思え」式の「性悪説」を説いていたのは老人のガロ叔父さんだった。ポラード先生も、教育者にあるまじき「性悪説」的偏見で、言葉に詰まって抗弁できぬ「僕」を端っから疑ってかかるのだ。

人は大きくなるにつれて、次第に、人間性に潜む〈醜さ〉、〈忌まわしさ〉、〈汚さ〉などに気付いていく。他人にそのような〈性悪さ〉を認めると言うよりも、むしろ自分自身の中にどうしようもない暗黒部分が潜んでいることに気が付くのである。自分の中に、人を疑い、人を妬み、人を呪い、人を侮り、人を憎む、そんな忌まわしき一面があることを悟るのである。人をけ落として自分だけ良い目を見たい、という利己主義的な我執の欲望が渦巻いていることに思い至るのである。

しかし、本当の意味での人間的成熟は、「性善説」を執るのでもない、「性悪説」を執るのでもない、一個の人間の中に善と悪が混在していることを認め、この真理を自分の中でも確と引き受けられるようになることだろう。自分の〈善なる部分〉を誉めてやる余裕と優しさを持ち、かつ同時に、自分にある〈醜悪なる部分〉を冷静に見つめ受け容れる勇気を持てることだろう。その意味では、この短編の「僕」はまだ自分の善なる純真さを何処までも信じ執着して、自分自身の中に〈醜悪なる部分〉を認めていない（認めようとしない）子供の未熟レベルに留まっているのかも知れない。だが、未熟だからこそ純真なままでいられる、という真理は成り立たないのであろうか。

少年が主人公で登場する〈開眼物〉のフィクションをアメリカ人がいつまでも好むのは、建前としては自分の内なる暗黒部分を認めながらも、実は本音では、社会のアンティテーゼとしての〈自然〉を、心の中にも追い求めているからではないのか。自然回帰を果して、幼少期の純真無垢の心的状態に立ち戻って、無期限にそこに住み続けたい、そんな欲求衝動に突き動かされているからではないのか。アメリカ人特有のフロンティア・スピリットとは、荒野を開拓し、インディアンを駆逐し、自然を文明社会に恭順させたものでは既になくなって、失われた自然や大地、失われた汚れ無き幼少時代を、いつまでも懐かしむノスタルジアを指しているのではないかと思う。その意味で言うなら、「僕」が熟れた梨に手を出して食べる時の「自然生命の本質を知るため」という言い訳は、アメリカ的な自然回帰欲求、自然生命力への合体衝動の表明でもあったと、結論できそうである。

### Ⅲ. 生きることの辛さ

現実社会には、子供に〈生きることの辛さ〉を教える世間の冷たさ、薄情さというものが厳として存在する。それは時には、両親がいないという不幸な境遇であったり、今日食べるものにも事欠くという家庭の貧困であったりする。そういった抗し難い苦難の下に置かれると、子供はただ自分が生まれてきたことの、今ここに存在することの、薄幸の運命を嘆くしかない。子供の立場は、所詮弱いものである。一人ではどうしようもない。世を拗ねたり、世をはかなんだりしながら、その場にじっと蹲るしかない。その悲しみに必死で耐えている子供の胸の内など、世間はお構いなしである。その世間の冷たさを、子どもは身を持って知るしかない。薄情な世間は、子供の悲しみなど、無関心を装うか、徹底無視するかのどちらかなのだ。

現実社会には、子供がじっと必死で耐えたり、あるいは悔し涙を流すだけでは済まされないような側面もある。何もしない、何も出来ない子供に対して、悪意に満ちた社会が呪わしい牙を剥くことが時としてある。子供はたじろぎながらも、精一杯の抗議と抵抗を試みるが、虚しく力尽きる。どうしようもない忌まわしさや醜さを目の当たりにして、子供は絶望するしかない。『笑い屋サム』 *Laughing Sam* は、ユダヤ人の少年が受難の民族性を背負いながらも、健気に明るく振舞おうとするのだが、結局、人種差別の〈いじめ〉と世間の冷たい無視のために16歳の短い人生を閉じることになる、そんな社会告発の内容を持つ悲劇の物語である。

「15年前の僕の故郷の町に、いつも笑ってばかりいるので『笑い屋サム』と呼ばれていた少年がいた」という書き出しで、小説と主人公紹介が同時に始まる。語り手の少年「僕」がサム少年と最初に知り合ったのは、「僕」が9歳か10歳の頃だった。彼の方が1～2歳年上だったから、当時彼は12歳くらいだった。彼が16歳で不慮の事故で死ぬ4年間ほど前のことだった。

ある日、家庭配達用の早版が刷り上がるのを、「僕」たち新聞少年がイーヴニング・ヘラルド紙の地下印刷室で待っていた時に、サムが責任者のバズ・マーチンに連れられて、その醜い姿をみんなの前に現した。こんな醜い顔つき、身体つきをした少年はそれまで見たことがないと思えたほどの、グロテスクな容貌の少年だった。しかし、彼にはどこか、悲劇的で、気高い雰囲気があった。みんなの好奇の視線を浴びて、新入りのサムがおびえ始めて、だんだんとパニックに陥っていくのが分かった。彼の目に恐怖と苦悶の色が浮かんだので、てっきり彼が泣き出すのだと思った。でも、彼は泣き出す代わりに、笑った。

彼にはユダヤ人の血が流れていた。いつもピリピリ緊張して、しかもオドオドしていた。みんなと仲良くしようとしたが、その親愛の情は他の少年達に伝わらなかった。世の中のあらゆることを恐がっていたために、逆に何でもかんでも笑い飛ばそうとした。しかし彼のその笑いはみんなには、不気味な、了解不能のものに映った。最初のうちは、からかいと冷笑の的だった。当然、他の少年達の当惑と反感も買った。軽く笑い飛ばそうとすればする程、意に反して、あらゆる災難、面倒事に巻き込まれてしまう、ヘマで、不器用極まる少年だった。気ばかり先行して、実行が着実に伴わないタイプだった。

ある日の新聞の見出しは、夜の幹線道路で起きた交通事故についてであった。「交通事故で5名死亡、アハハハハ」と見出しを叫びながら、彼は町中を駆けて新聞を売った。サムが僕の持ち場を通りかかった時、さすがに我慢が出来なかったので彼を呼び止めた。笑うべきでないことまで笑い飛ばすことは許せなかった。「ちょっと待てよ。なにも笑うことはないじゃないか」と、彼に詰め寄った。彼はハッと息を止めながら、「僕は笑ってなんかいない」と言った。



「僕」は急にその時、全てが分かった気がした。彼の笑いの意味するものが分かった。

Then I knew what the hell was going on: he wasn't laughing. It sounded like laughing, but he was crying. His heart was breaking about everything, and he was crying. He was doing it by laughing. (p. 27)

「僕」がサム之死を知ったのは、エレベーターに押しつぶされた彼の事故死を伝えるイーヴニング・ヘラルド紙の紙上だった。倉庫の貨物用エレベーターを操作していた時に、エレベーターが止まるはずのところ止まらなかったため、サムはパニックに陥ったのだ。止まらずにまだ動いているエレベーターに飛び乗ろうとして失敗し、足を滑らせて落ちた。身体がエレベーターに押しつぶされる直前まで、「ハハハッ」と強がりの笑いをしていたのだろう、と「僕」は推測した。彼の過失だと誰もが証言したのだが、彼が機械を恐がっているのを知って、みんながわざとその操作を彼にやらせていたらしい。「サムはこの世に16年間生きて、その間ずっと笑い続けていた。でも彼は泣いていたのだ。千年も前に生まれてこのかた、15年前のあの息を引き取る瞬間まで。」

父親に関する記述が皆無で、しかも貧困に喘ぐ家計状態からして、サム少年は母子家庭の子供であるらしい。新聞売りのアルバイトをして、「小銭を稼いで少しでも母親の許に帰りたい」という一心で、辛さを我慢する、心根の優しい、母親思いの子供である。孝行息子の模範となるべき少年である。一途のその思いが細やかであるだけに、一層、彼が宿命として負わされた悲劇性が浮き出てしまう。しかも、サムが、自分の過失からエレベーターに押しつぶされて、無様でヘマな死に方をすることが小説の冒頭から読者に明かされている。主人公が死なねばならない悲惨な運命であること以上に、小説自体が孕む深刻な問題性を物語るものがあるまい。

サム少年には、一途で純真で優しい内面性に反比例するように、グロテスクな容貌が賦与されている。「鼻はわし鼻、髪は黒く、額はさほど広くなく、にきびだらけ、唇は分厚く、びっくりするほど馬鹿げて見える耳」をしていた。醜さは顔つきだけではなく、「腕は短く、指は太く短く、大変な撫で肩で、すこぶる大きな足」だった。サーカス小屋の見せ物とまではいかないが、肉体的には畸形に近く、均衡の崩れた、見苦しい外見を呈していた。昔の奴隷のように痛めつけられ虐待されたかに見える、彼のやせ細った哀れな肉体は、ある種の威厳と悲壮さを伴って救世主イエス・キリストのイメージを喚起させたのだ。

サムの救いようの無い外面的醜貌と、おどおどとした自信無げな態度は、常にキリスト教的西洋社会にあって迫害と差別の対象であったユダヤ民族の、その受難の民族の宿命性を象徴している。「強欲にして冷酷無情」というあのお決まりの〈醜いユダヤ人〉のイメージが、そっくりそのまま、生贄としてのサムに付着したのだ。彼は血の中を流れる恐ろしい〈声無き声〉に取り憑かれることになる。

He seemed to be haunted by an instinctive tribal remembrance in his blood: Get away, get out of it, go to another place, hide, run, do not stay among them, they will kill you. (p. 25)

彼がアルバイト初日、新聞が刷り上がるのを待っていた時にパニックに陥ったのも、人混みの中にいると不安と恐怖で居ても立ってもいられなくなるからだ。何処にいても「場違い」な意識に因われ、心の安らぎ場所が無い。分裂病的な迫害妄想ほどではないが、絶えず自意識過剰の孤独感や疎外感に苛まれていて、それが現代人の実存不安にも通じる普遍性を担っている。単に、事はユダヤ人の人種差別の問題に留まらない。現代人特有の自意識や心の安息の問題、「自と他」・「内と外」のテーマに絡む対人距離の取り方の問題などが、すべて関わってくる。サム少年の存在自体がそういう問題性を内包している。

しかし、彼の内面の苦悩に気付いて同情する者はいない。彼のおどおどとした滑稽な態度、緊張しながらもヘマをしてずっこける間抜けさ、失敗してもヘラヘラ笑ってばかりいる卑屈さなどが、「少し彼をからかってやれ」という誘惑にみんなを駆り立ててしまう。もともとが、不格好、不器用、無様、滑稽という要素は、〈いじめられっ子〉の一つの大きな成立要件だった。人間誰しも、怯えている他人を見ると、ついからかったり、虐めてみたくなるような残忍さや攻撃性を持っている。子供は特に、陰湿という訳ではないのだろうが、本能的に容赦なく、相手をやっつける攻撃衝動を露に見せることがある。サムを取り巻く少年達は、群衆心理で次第にいじめをエスカレートさせて、ついには彼のズボンを脱がせ印刷用のインクを塗りたくった。しかし、サムはまた笑うだけなのだ。「インクを付けちゃってくれたね。アハハハハッ。なかなか落ちないよ。」

サムは何故笑ってしまうのだろうか。語り手の少年「僕」が後で知って愕然としたように、彼が「顔で笑って、心で泣いている」ことは明らかである。泣きたい気持ちを堪えて、笑顔を作ることで自分自身を勇気づけ、鼓舞しているのだろうか。怯え、萎縮する心を見透かされないように、一種の自己防衛のために、精一杯必死の作り笑いをしているのだろうか。彼の置かれた哀れな状況は泣くには余りにも悲惨すぎる、笑い飛ばすしかない、という限界ぎりぎりを示す笑いなのか。自分の内なる本能衝動（秘められた攻撃心や悪意、反抗心など）を押し隠すための、反動形成としての意味を持つ愛想笑いなのか。或いは、「根アカ」に振舞えば友だちができるという誤解に基づいた、周囲に向ける彼の親愛の情を示す笑いだったのか。実際、サムの笑いは、それらの意味合い全てを含む笑いであるように思える。

肝要なことは、サム少年が心の中では不安や絶望の涙を流しながら、滑稽に笑い続けるピエロの役を演じるという事実である。最初の内は、作り笑い、愛想笑い、親愛の情の笑いであったものが、いつの間にかその笑顔が顔に張り付いて取れなくなってしまったかのようだ。日本の昔話にも、付けている内に顔の皮膚に根を下ろしてくっついてしまい、絶対に外れなくなってしまった怨霊の能面の話がある。もはや自分の意志では脱着出来なくなった笑顔の仮面（外的自我のペルソナ）を持って余し気味にしながらも、サムは笑い続けなければならない。仲間少年たちからの〈いじめ〉にも、無抵抗のまま、笑顔を向ける。何事も、受身でやり過ごそう、穏便に済まそう、波風を立てたくないという気持ちが根底にあるのであれば、無論それは、流浪の民であるユダヤ人が、地域社会に受け入れてもらうために、泣く泣く身につけてきた、悲しくて哀れな処世術と言っているのだろう。

本人の意に反して、笑顔の仮面が顔に張り付いて取れない、そのこと自体が、人間存在の悲哀や不条理性、不可思議などを物語ってやまない。いや、サムの存在自体が、不気味な、グロテスクな容貌そのままに、衝撃を伴って読者に迫って来るのだ。外向きの陽気な笑顔や楽天性とは正しく対照的な、人を呪い、世間を恨み、人生を嘆き、運命を悲しむ、そんな彼の素顔も覗いている。微笑みを振りまくピエロの真顔は、笑顔では到底あり得ない。滑稽なピエロと

しての、喜劇的道化性の演出効果があつてこそ、彼の存在に秘められ悲劇性も浮き彫りにされるというものである。

彼は確かに〈生贄〉として死ぬ運命を担わされている。人々に巣くう忌まわしい心、人種差別の心、弱者をいじめたくなる心、集団心理で増幅される攻撃心、そういった醜悪な人間性の犠牲になった。世の人々の罪を背負って身代りの処刑を受けた救世主のイメージさながらである。そしてまた、印刷機やエレベーターなどの大型機械に怯えていた彼は、来るべき機械文明にあっては生き残れない欠陥商品であることを実地に証明するかのよう、エレベーターに押し潰されるという悲惨な死に方をするのである。出来損ないの不良品がプレスで潰されるように、彼はこの地上から抹殺されたのだ。

サム少年がこの短編で提起する問題性を、今日の日本の子供を取り巻く状況に当てはめると、色々なことを考えさせられる。人間を外面的な物差しで計ろうとする悪しき風潮、簡単に人間に欠陥品の烙印を押してしまう世間の非情さ、生贄を作らずにはいられない殺伐とした〈いじめ〉の構図など、知らず知らずのうちに子供の心を絶望にまでに追い込んでしまう差別の状況を考えるきっかけを与えてくれる。また同時に、偽りの仮面を脱いでもっと率直に助けを求められなかったのかという幾ばくかの疑問、自意識の呪縛に囚われてしまう我執の悲しさ、救いようのない自分の孤立状況を神経症的に自分で笑ってしまう哀れさと不可解さなど、人間存在そのものが持つグロテスクな不条理性も考えさせられるのである。

テキストは *The Saroyan Special* (New York: Harcourt, Brace & Company, 1948) を使用した。

#### 参 考 文 献

1. Edward Halsey Foster, *William Saroyan; A Study of the Short Fiction* (New York: Twayne Publishers, 1991)
2. Elisabeth C. Foard, *William Saroyan; A Reference Guide* (Boston: G. K. Hall & Co., 1989)
3. 中島偉晴、『閃光のアルメニア』、J. P. P. (神保出版会)、1990
4. 藤野幸雄、『悲劇のアルメニア』、親潮社、1991
5. 佐藤信夫、『アルメニア史 — 人類の再生と滅亡の地』、泰流社、1988
6. アメリカ学会 (編)、『原典アメリカ史 (第5巻)』、岩波書店、1982